慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾図書館所蔵アルフォンソ10世関連写本ファクシミリ版二作品解説：『聖母マリアの古謡集』および『チェス, さいころ, 盤上ゲームの書』
Sub Title	Las Cantigas de Santa María y el Libro de los juegos de ajedrez, dados y tablas de Alfonso X : En torno a dos facsímiles conservados en la Biblioteca de la Universidad Keio
Author	瀧本, 佳容子(Takimoto, Kayoko) 黒田, 祐我(Kuroda, Yuga) 押尾, 高志(Oshio, Takashi) 久米, 順子(Kume, Junko) 鎌田, 由美子(Kamada, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.54 (2022.) ,p.75- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20221231-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

慶應義塾図書館所蔵アルフォンソ10世関連写本ファクシミリ版二作品解説[1)]
――『聖母マリアの古謡集』および『チェス，さいころ，盤上ゲームの書』――

瀧本佳容子，黒田　祐我，押尾　高志，
久米　順子，鎌田由美子

0.　はじめに

本稿は，慶應義塾図書館が所蔵する中世写本のファクシミリ版『聖母マリアの古謡集』（*Cantigas de Santa María,* 1270–83, エル・エスコリアル王立修道院図書館 MS T. I. 1）（以下『古謡集』，なお「頌歌集」「詞華集」「カンティガ集」と訳されることもある）および『チェス，さいころ，盤上ゲームの書』（*Libro de los juegos de ajedrez, dados y tablas,* 1283 頃，同上 MS T.I.6. 以下『ゲームの書』）の解説である。二作品ともカスティーリャ王アルフォンソ10世（在 1252–84）の命で編纂され，同王の名を付した多くの作品の中で挿絵の豊富さと美しさで傑出している。慶應義塾図書館が所蔵するのは，エル・エスコリアル王立修道院図書館が所蔵する二作品の写本を復刻し詳細な解説本を付けたものである[2)]。制作したのは写本ファクシミリ版の工房として定評があるスペインの Testimonio 社（『古謡集』）および Scriptorium 社（『ゲームの書』）で，特に後者は原本と同様に羊皮紙を使用した貴重な版である。

次章以下では二作品を五人の専門家が多角的に解説する。まず瀧本（第1章）がカスティーリャ文化・文学史上の意義を，そして黒田（第2章）がヨーロッパ中世史の，押尾（第3章）がイスラーム史のそれぞれの視点から時代背景を述べる。次いでスペイン中世美術専門の久米（第4章）とイスラーム美術の鎌田（第5章）が写本の挿絵・装飾について解説する。

1）　本稿は科研費基盤研究（C）「中世イベリア世界の多文化共生再考：アルフォンソ10世賢王時代に関する学際的研究」（22K00955）の成果の一部である。

2）『古謡集』（*Cantigas de Santa María,* Madrid: Testimonio, 2011）の請求記号は 141Y@76@1–3，『ゲームの書』（*Libro de los juegos de ajedrez, dados y tablas,* Valencia: Scriptorium, 2010）の請求記号は 142Y@77@1（本体），1LB@3284（解説）。

キリスト教，イスラーム教，ユダヤ教という三宗教の信徒が共存する中世カスティーリャの王たちは，これら三教徒を統べる君主を自認した。そのためアルフォンソ 10 世が編纂させた諸作品はスペインのみならずイスラームおよびヨーロッパの文化・文学の歴史において非常に大きな価値と意義を持つ。慶應義塾図書館は，アルフォンソ 10 世に由来する『天文表』のインキュナブラ（1500 年以前に活版印刷された揺籃期印刷本）も所蔵している[3)]。カスティーリャ文化史に一時代を画しヨーロッパ全体にも影響を及ぼしたアルフォンソ 10 世関連の貴重な資料を複数所蔵している国内の学術機関はおそらく慶應義塾図書館のみである。

1. アルフォンソ 10 世の文芸政策[4)]

アルフォンソ 10 世は，カスティーリャ語（スペイン語）による国内用公文書作成を制度化し，文芸活動を保護推進したことから「賢王（el Sabio）」と称され，カスティーリャ語史では「カスティーリャ語散文の創造者」と呼ばれている。当時のヨーロッパにおいて，学問や国際政治などではラテン語が使用され，各々の国や地域で日常的に使われるカスティーリャ語やフランス語などは「俗語」と呼ばれていた。アルフォンソ 10 世が俗語を高尚な事柄を記すための言語としたのは，純粋な言語学的興味からよりはむしろ王国統治のためであった。アルフォンソ 10 世は父フェルナンド 3 世（在 1217–52）から 13 世紀前半の「大レコンキスタ」で拡大した領土を継承し，そこにはキリスト教，イスラーム教，ユダヤ教の三教徒が微妙な均衡と緊張のもと共存していた。このような王国を統治するにあたってアルフォンソ 10 世は，カスティーリャ語の質と権威を高め，王国の一体性を担保する役割を与えようとしたのであった。

アルフォンソ 10 世はカスティーリャ語で説話・法律・歴史・科学（天文学や貴金属）などの様々な分野の文献を編纂させた。いずれも重要な文献ばかりだが，俗語初の普遍法である『七部法典』（*Las Siete Partidas,* 1256–65），いずれも未完の史書『スペイン史』（*Estoria de España,* 1270–74, 1282–84）および『大世界史』（*General estoria*, 1270 編纂開始）などが特に重

3） Alphonsus, Rex Castellae, Johannes Lucilius Santritter (ed.), *Tabulae astronomicae*, Venice, Johannes Hamman, 1492（請求記号 120X@855@1）．慶應義塾大学メディアセンター デジタルコレクションでの閲覧も可能（https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/incunabula/032）。

4） 本稿執筆にあたって主に参照したのは次の文献である。Gómez Redondo, Fernando et al., “Alfonso X” en Alvar, Carlos y Lucía Megías, José Manuel (dirs.), *Diccionario filológico de literatura medieval española. Textos y transmisión,* Madrid, Castalia, 2002, pp. 1–86. Gómez Redondo, Fernando, “Alfonso X”, en Gullón, Ricardo (dir.), *Diccionario de literatura española e hispanoamericana. A-M,* Madrid, Alianza, 1993, pp. 41–44. Lacarra, María Jesús y Cacho Blecua, Juan Manuel, *Historia de la literatura española. I. Entre oralidad y escritura: la Edad Media*, Barcelona, Crítica, 2012. Montoya, Jesús, “Introducción” a las *Cantigas* de Alfonso X el Sabio, Madrid, Cátedra, 2008 (4a. edición; 1a. edición en 1988), pp. 11–71. Saraiva, Antonio José, *Breve historia de la literatura portuguesa*, traducción de J. A. L., Madrid, Istmo, 1971.

Fig. 1 『ゲームの書』65 葉表，宮廷のアルフォンソ10 世
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 2 『古謡集』5 葉表，宮廷のアルフォンソ 10 世（以下，音楽家写本と書かれていないものはすべて豪華写本）
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

要である。各文献の編纂には複数の専門家があたり，アルフォンソ 10 世の役割は方針を示すことだったが，自ら創作や加筆修正に加わることもあった（Figs. 1–3）。この文芸促進策の素地となったのは，まず，12 世紀を中心にトレドで三教徒が協働して行った翻訳活動である。イスラームが中世ヨーロッパにもたらした古代地中海世界の学問・文芸がラテン語に翻訳され，中世キリスト教ヨーロッパの知的活動に一大変革がもたらされた。また，父フェルナンド 3 世が学者や詩人と共に宮廷で学問や詩に関する議論を習慣化していたことも前史として挙げられる。

Fig. 3 『古謡集』音楽家写本 29 葉表，宮廷のアルフォンソ 10 世
出典：Patrimonio Nacional. Real Biblioteca de Palacio.

上のような環境からうまれたのが『ゲームの書』である。これは，息子サンチョが起こした謀反から逃れた先のセビーリャで 1283 年に制作され，アルフォンソ 10 世の名を付した最後の作品となった。書名通り，ゲームに興じている人物たちがゲーム図と共に 150 の細密画に描かれている。文章はゲームの説明のみで細密画に関する情報はないが，キリスト教徒だけではなく，ムスリム（イスラーム教徒）やユダヤ教徒をはじめ多種多様な人物や風俗が描かれている。同書の序文には，ゲームは楽しみをもたらすのみならず，チェスは社会構造や戦の縮図で，さいころは運命に左右される遊戯である旨が述べられている。つまり，これらの遊戯を行うことは，貴族にとっては一種の帝王学にほかならなかった。

『古謡集』はイベリア北西部で盛んだった音楽を伴う抒情詩カンティガ（cantiga）の影響を受け，その地の俗語であるガリシア＝ポルトガル語の韻文で編纂された，400 以上におよぶ聖母マリアの奇跡譚と音楽である。アルフォンソ 10 世は幼少の一時期をガリシア地方マセーダで過ごしてガリシア＝ポルトガル語に親しんだ。また，当時のイベリアでは，ガリシア＝ポルトガル語とカタルーニャ語でプロヴァンス由来の抒情詩が盛んにつくられていた。プロヴァンス派の詩人たちをフェルナンド 3 世もアルフォンソ 10 世も宮廷に受け入れ，アルフォンソ 10 世はカスティーリャ語でもカンティガをつくらせたが，これを質量共に圧倒するのが『古謡集』である。エル・エスコリアル写本 T. I. 1 では，195 の奇跡譚が文章と漫画のようにコマ割りされた細密画で表現され，楽譜がついている。

『七部法典』第 2 部第 5 条第 21 項は「王が苦労や悩みを抱えている時には，歌や演奏を聞いたり，チェスや盤上ゲームなどをしたりするのが良い。歴史書や物語，音楽や遊戯に関する本にも同じことが言える。これらから人は歓喜と愉悦を受け取るからである」と述べている。アルフォンソ 10 世が晩年に逆境の中でつくらせた最後の作品が『ゲームの書』だったことは象徴的だと言えよう。

2. アルフォンソ 10 世とその時代

2-1. ふたつの事業――「南北」へ目を向けるアルフォンソ 10 世

イベリア半島は 8 世紀初頭のウマイヤ朝勢力による征服以来，西欧世界とイスラーム世界との境域であり続けた。半島北部に自生的に成立したキリスト教諸国社会は，常にアンダルス（イスラーム・スペイン）と接し続けたという事実により固有の特質を備えていく。とりわけ「レコンキスタ」という理念を政治的に掲げたアストゥリアスから，レオン，そしてカスティーリャ王国へと繋がる政治領域は，対立の側面と融和の側面の双方を先鋭化させ，固有の政治理念を編み出し，それに則った社会を形成した。

地中海を中央に置き，その北岸の西欧世界，南岸アフリカ側のイスラーム世界（マグリブ・イフリーキヤ）の双方の動静を巨視的に眺めると，13 世紀とは，南北の交流が中世においておそらく最も活発となった時代であった。ローマ教皇の主導による介入，新興の托鉢修道会士による平和的説教，政治・経済的利害を念頭に置いた交易・外交関係樹立，そして十字軍という軍事的侵略とが連関しながら，情勢が目まぐるしく推移した世紀であった[5)]。

1252 年 5 月 30 日，精力的な征服活動（いわゆる「大レコンキスタ」）を果たした末，入植事業をセビーリャで指揮していた父フェルナンド 3 世が死去した。翌々日 6 月 1 日，父を埋葬

5） 13 世紀の地中海･西欧情勢について詳しくは以下を参照。S. ランシマン（榊原勝，藤澤房俊訳）『シチリアの晩禱―13 世紀後半の地中海世界の歴史』太陽出版，2002 年。

するとともに，何ら特別の儀礼を伴わずにアルフォンソ10世は即位した[6]。アンダルシーアの入植整備事業を継続するかたわら，王国全土で通用する法の整備と行政改革に邁進していた彼のもとに1256年3月，ピサの使節が来訪，彼は神聖ローマ皇帝の候補者として推戴される。母ベアトリスはホーエンシュタウフェン家の生まれであり，神聖ローマ皇帝フィリップ・フォン・シュヴァーベン（在1198–1208）の娘にあたるため，継承権は正当なものであった。以後，皇帝位を切望するアルフォンソ10世は，困難を極める諸勢力間，ローマ教皇との折衝に苦心する。また知的政策として，この世界の秩序と法理の総体を『七部法典』というかたちで編纂させ，西欧キリスト教世界の頂点たる神聖ローマ皇帝を主張するに相応しい人物であることを認めさせようとした。神聖ローマ皇帝位獲得の野心とそれに付随する交渉は「帝国事業（fecho del Imperio）」と総称されている。

この一方で，彼は即位当初からアフリカ側，すなわちマグリブへと影響圏を拡大する野心も強く抱いていた。これは「アフリカ事業（fecho de allende）」と呼ばれている。1254年3月31日付でイングランド王ヘンリー3世（在1216–72）と取り交わした協約では，対アフリカ十字軍が実施される場合に共同戦線を張ることを約している。1260年，事前にアラゴン連合王国の協力を取り付けたうえで，おそらくジブラルタル海峡対岸の要衝セウタの征服を目論んでいたようであるが，急遽方針転換して，一時的にサレ（マグリブ大西洋岸北部）を占拠するに至った。さらに封建家臣となっていたナスル朝君主ムハンマド1世（在1232–73）には，海峡都市アルヘシーラスとタリファを割譲するよう圧力をかけている。そして1262年，ナスル朝君主と同じく臣従下に入っていたムスリム君侯の治めるニエブラを武力征服するに至った。一連のアルフォンソ10世の行動がアフリカ進出を念頭に置いているのは明らかである。

1264年の5月，状況が一変した。アンダルシーア地域とムルシア地域で領民の多数派を占めていたムデハル（イスラーム教徒臣民）らが，ナスル朝君主ムハンマド1世の煽動をうけて大挙して武装蜂起したのである。これと同時に，ナスル朝君主はアルフォンソ10世との臣従契約を破棄し，マグリブのマリーン朝と結託し開戦した。武装蜂起自体は早々に鎮圧され，ナスル朝とも再度休戦を締結して平穏はもたらされたものの，ジブラルタル海峡両側の権益をめぐる確執は，他の諸勢力を巻き込んで以後80年近く継続する。マグリブ権益とは，ある書状の中でムハンマド1世自身が述べたとされているように，「かのもの［＝神聖ローマ帝国］よりはるかに偉大で良き帝国（muy mayor e meior imperio que áquel）」であった[7]。

6） 歴史学の観点からアルフォンソ10世期を包括的に扱った研究として，情報の質と量の両面において以下が有益であろう。O'Callaghan, J. F., *The Learned king: the Reign of Alfonso X of Castile*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 1993; González Jiménez, M., *Alfonso X el Sabio*, Barcelona, Ariel, 2004.

7） 蜂起に至る経緯については，黒田祐我「中世カスティーリャ王国における「レコンキスタ」と「十字軍」―関連史料訳―」『エクフラシス別冊』1（2014），108–112頁を参照。

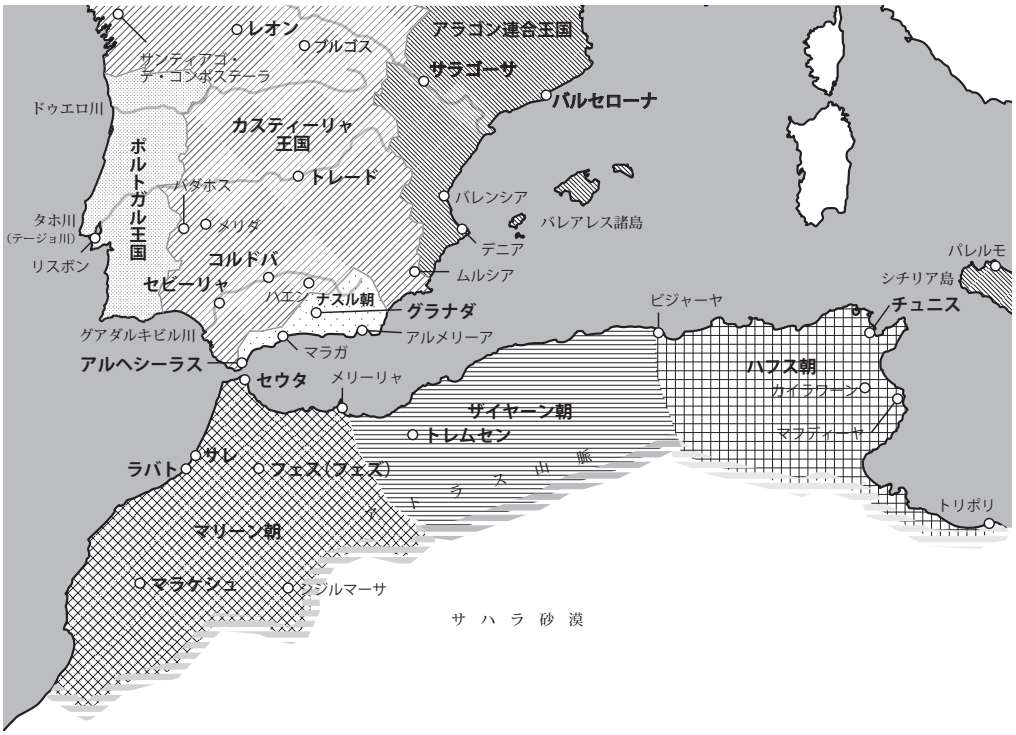
2-2. 「帝国」構築への野心と挫折

イベリア半島，とりわけカスティーリャ王国では，11 世紀から 12 世紀にかけて「二宗教皇帝」とでも訳すべき理念が存在した。これは，ムデハルに加えて，アンダルスのイスラーム教徒勢力をも自らの傘下に取り込もうとする壮大な目論見であった。称号自体は 12 世紀後半から登場しなくなるものの，アルフォンソ 10 世はこの記憶を受け継ぎながら，独自の「帝国」を建設しようと躍起になったのではあるまいか。

彼の理想とする「帝国」とは，まず『七部法典』に示されているように，「神の代理人（Vicario de Dios）」として自らが君臨し，教会は王権のための「役人」として奉仕する領域であった。この「帝国」にはユダヤ教徒，イスラーム教徒もまた重要な臣民として内包された。確かに，先述した「アフリカ事業」や国内統治の過程で，ムデハルに対する過酷な政策がとられ，また『七部法典』で彼らが「二級市民」の扱いをうけていることも事実であり，これを単純な宗教的寛容精神の現れとみなすことはできない。しかし「帝国」に居住する異教徒臣民に由来する文化を保護することにアルフォンソ 10 世が積極的であったこともまた事実である。彼がつくらせたセビーリャ大聖堂内，父王フェルナンド 3 世の墓廟に記された四言語（カスティーリャ語，ラテン語，ヘブライ語，アラビア語）による墓碑は有名であろう。スペイン・ゴシック建築の白眉として名高いレオンのカテドラルを建立すると同時に，かの有名なコルドバのメスキータの維持にも力を注いでいる。

「帝国」には，「知を司る王」が君臨せねばならなかった。この王権観に則った社会を具現化するための壮大な試み，それこそが，極めて多岐のジャンルにわたる文芸振興事業の真の目的であった。俗語を意図して整備し，俗語を用いて王国全土に通用する法を普及させ社会を安定させようとした。歴史書を編纂して，臣民の共有できる過去，安定した王国の存立基盤を提供した。そしてアラビア語からの種々の翻訳を行い，本稿で紹介する『古謡集』，『ゲームの書』に至るまでの知の総体を，ラテン語ではなく俗語で示そうとした。J. ブルクハルトによって「最初の近代人」と評され，E. カントロヴィッチによって神格化されたシチリア王兼神聖ローマ皇帝フリードリッヒ 2 世と比べると，アルフォンソ 10 世の知的営為が我が国で十分に知られているとは言い難い。しかし実際は，シチリア王国のパレルモ宮廷と同様，フリードリッヒ 2 世に勝るとも劣らない知的貢献を果たしているのである。

状況が暗転したのは，彼が齢五十を迎えた 1272 年からである。彼の「帝国」建設に賛同しない王族や貴族，都市の反抗に苦悩し続けるなか，1275 年に「帝国事業」すなわち神聖ローマ皇帝位獲得交渉が頓挫し，即位の望みは完全に絶たれた。さらに同年，マリーン朝君主アブー・ユースフ（在 1258-86）自ら率いる軍勢がアンダルシーアを席巻し，迎撃に向かう長男フェルナンドはその途上で病死，9 月初頭のエシハ会戦ではアルフォンソ 10 世の竹馬の友ヌーニョ・ゴンサレスも戦死した。マリーン朝のアンダルシーア攻撃は 1285 年まで続くが，それよりもアルフォンソ 10 世を失意の底に突き落としたのが王位継承問題であった。亡くなった



地図　13 世紀後半の西地中海地域

嫡男フェルナンドの息子アルフォンソへの王位継承を表明した時，不満を抱き続けてきた王国有力者，そして都市のほとんどが，こぞって次男サンチョ（後の国王サンチョ 4 世）のもとに参集，反旗を翻したのである。王国は内戦状態となり，ここにマリーン朝，ナスル朝も軍事介入して状況は泥沼化した。完全に孤立したアルフォンソ 10 世は，自身に忠実であり続けていた都市セビーリャに事実上閉じ込められるかたちとなる。自らの「帝国」の都，そしておそらく最も愛着を抱いていたこの都市セビーリャで，次男を呪いつつ亡くなる直前まで，彼は写本を作成し続けていたのであろう。

3.　12–13 世紀西地中海地域におけるイスラーム王朝の変遷

8 世紀初頭以降，イスラーム支配下に組み込まれたイベリア半島および北アフリカを含む西地中海地域は，それぞれアンダルス，マグリブ（およびイフリーキヤ）と呼ばれるようになった。これらの地域は，イスラーム世界の中心地（マシュリク）での政治的宗派的な紛争や対立から逃れてきた人々がさまざまな王朝を形成する地でもあり，マシュリクのイスラーム王朝による直接的支配が及ぶ地域ではなかった[8]。このような分裂状態は，11 世紀にムラービト朝

が登場したことで変化を迎える。

3-1. ムラービト朝，ムワッヒド朝によるアンダルス・マグリブの統合

サハラ砂漠西部のサンハージャ系ベルベル部族の宗教改革運動に起源を持つムラービト朝は，マーリク派法学を王朝理念として，アッバース朝カリフを頂点とするスンナ派の世界秩序に自らを位置づけた。同王朝は，イスラーム法に則った厳格な統治を行うことを目指し，非合法税を廃止したり，キリスト教徒の軍事的圧力からのアンダルス防衛に努めたりした。その軍事力を経済的に支えていたのは，塩と金を中心として多様な交易品を扱うサハラ交易であり，これにより 1062 年に建設された王都マラケシュは大いに繁栄した。アンダルスとマグリブの統一的支配は，人やモノの往来をも盛んにし，マグリブにはアンダルスから法学者やスーフィズムなども流入した[9]。しかし，ムラービト朝の支配は1118年のサラゴーサ失陥に見られるようなキリスト教諸国に対する軍事的劣勢や，反ムラービト朝闘争の激化，軍事力低下を補うためのキリスト教徒傭兵の登用と[10]，その費用を補填するための非合法税の復活などを要因として崩壊していく。

ムラービト朝にかわってアンダルス・マグリブを支配したのはムワッヒド朝である。同王朝の始祖イブン・トゥーマルトは，アトラス山中のマスムーダ系ベルベル部族の出身で，各地を遊学したのち独自のタウヒード神学をひらき，最終的にはマフディー（救世主）を自称した。彼の死後，後継者たちは反ムラービト朝闘争を本格化し，1147 年にマラケシュを攻略して同王朝を滅ぼした後，アンダルスやイフリーキヤにまで版図を広げた。

ムワッヒド朝は，タウヒード神学を王朝理念として，従来の宗教的政治的秩序に対する多くの挑戦を行い，非ムスリム住民に対しイスラーム信仰への強制改宗などの抑圧的な政策をとった。その一方で，キリスト教諸国との外交関係を樹立し，ムラービト朝と同様にキリスト教徒傭兵を用い続け，13 世紀半ばには彼らのために王都マラケシュにキリスト教教会を新たに建築することを許可した[11]。ムワッヒド朝に仕えるキリスト教傭兵の姿は『古謡集』の挿絵にも見ることができる（Fig. 14）。また，同王朝下では伝統的な法学者の影響力が減退したことで，

8） マグリブでは，8 世紀半ばからアグラブ朝やルスタム朝，イドリース朝が，10 世紀にはシーア派のファーティマ朝が成立したことで，アッバース朝の支配が及ぶ地域ではなくなっていった。佐藤次高編『西アジア史Ⅰアラブ（新版　世界各国史 8）』山川出版社，2002 年，192-212 頁。

9） 野口舞子「12 世紀前半におけるムラービト朝のマグリブ支配：ウラマー，スーフィー，聖者との関係から」『イスラム世界』88 号，2017 年，4-6 頁。

10） 黒田祐我「両文明を越境する傭兵―中世西地中海世界におけるキリスト教徒」『歴史学研究』881 号，2011 年，13-14 頁。

11） Fierro, Maribel, “The Almohads (524-668/1130-1269) and the Ḥafṣids (627-932/1229-1526),” in *The New Cambridge History of Islam. Volume 2: The Western Islamic World, Eleventh to Eighteenth Centuries*, ed. M. Fierro, Cambridge, Cambridge University Press, 2010, pp. 80-81.

イブン・ルシュド（アヴェロエス）などの哲学者が活躍するなど，西方イスラーム世界の思想潮流の変化が起こりつつあったことも指摘されている[12)]。

3-2.　ムワッヒド朝の滅亡とマグリブの再分裂

イスラーム共同体の防衛戦争（ジハード）の成否は，ムワッヒド朝にとっても王朝の正統性を補完する重要な要素であり，その趨勢に大きく影響した。1212 年のラス・ナバス・デ・トローサの戦いでの敗北後，ムワッヒド朝は加速度的に衰退していくが，キリスト教諸国側の攻勢も各々の君主の相次ぐ死によって 20 年代まで停滞した。王朝の分裂が決定的になったのは，カリフの後継者争いにカスティーリャ王国が介入し，カリフ・マームーンがタウヒード神学をはじめとする王朝理念を否定した 1229 年以降である。これを機に西方イスラーム世界の政治的統一は再び失われ，イフリーキヤにはハフス朝が，マグリブ中央部にはザイヤーン朝（アブド・アル・ワード朝）が，マグリブ西部にはマリーン朝が続々と勃興した。これらの王朝との戦いに専念するため，ムワッヒド朝は 1238 年以降アンダルスから撤退したが，1269 年にマリーン朝によって王都マラケシュを攻略され滅亡した[13)]。

上記の三王朝はムラービト・ムワッヒド両王朝と同じく，ベルベル系王朝であったが，王家や社会制度，言語などはアラブ化が進行していた。ムワッヒド朝のチュニス総督が打ちたてたハフス朝は，ムワッヒド朝の正統な後継国家を自認しており，王都チュニスは，フランス・カタルーニャ・イタリア商人が商館を構え，地中海交易の中心地の一つとして大いに繁栄した。また 1270 年には，フランスのルイ 9 世による第 7 回（第 8 回）十字軍の攻撃を撃退し威信を高めたが，その後は王位継承争いが勃発し，14 世紀にはマリーン朝の攻撃にさらされることになった。

ザイヤーン朝もまた，ムワッヒド朝のトレムセン総督が 1235 年に独立を宣言して成立した王朝で，王都トレムセンはマグリブ東西を横断する交易路とサハラ以南へと至る南北を縦断する交易路が交わる場所に位置していたため，交易中心地として繁栄した。その豊かさは周辺諸国の野心を刺激し，ハフス朝，マリーン朝，さらに 15 世紀以降はアラゴン連合王国といった強大な隣国からの介入や断続的な支配を受け続けた。

3-3.　マリーン朝とイベリア半島への介入

マリーン朝はムワッヒド朝に服従していた遊牧部族のザナータ系マリーン族が打ち立てた王朝である。ラス・ナバス・デ・トローサの戦い後に，マリーン族はムワッヒド朝への攻撃を開始し，アブー・ユースフの時代に同王朝を滅ぼした。ムラービト朝とムワッヒド朝がマラケシュを王都としたのに対し，マリーン朝はフェスを王都に定め，宮廷などから構成される新フェ

12）　Buresi, Pascal, “Berber rule and the Maghribi caliphate. The Almohads,” in *The Routledge Handbook of Muslim Iberia*, ed. Maribel Fierro, London, Routledge, 2020, pp. 114–144.

13）　Buresi, “The Almohads,” pp. 122–124.

スを建設した。フェスには多数のモスクやマドラサ（学院）が設立され，アンダルスからの移民も流入し，同都市はモロッコの学術的文化的中心地となった。

アブー・ユースフは，五度（1275 年，77 年，79 年，82 年，85 年）にわたってイベリア半島への遠征を行ったが，この一連の遠征は，アンダルス征服の意図からではなく，王朝の宗教的正統性を補うジハードとして行われたものと考えられる。82 年の遠征では，アルフォンソ 10 世とその王子サンチョとの間の内紛に介入し，アルフォンソ 10 世を支援した。その後，85 年にはカスティーリャ王国とマリーン朝の間で和平協定が締結され，カスティーリャ側に奪われていたクルアーン（コーラン）を含むアラビア語写本の返還も実現された[14]。その後もマリーン朝は，ジブラルタルとアルヘシーラスを橋頭堡として保持し続けたが，14 世紀半ばにこれらの拠点を失い，半島への軍事的介入は途絶えた。

ムワッヒド王朝の滅亡後，西方イスラーム世界の政治的統一は失われ，各地で王朝が自立したことで，イスラームとキリスト教との関係はより個別化・複雑化していく。両信仰間の宗教的境界を越えた関係は，『ゲームの書』や『古謡集』の挿絵からも視覚的に理解されるだろう。各地のイスラーム王朝は，ヨーロッパ諸国との外交・通商関係を樹立し，ときに軍事的に対立した。西地中海地域におけるイスラームとキリスト教の勢力均衡が大きく変化していくのは 14 世紀半ば以降のことである。

4. アルフォンソ 10 世関連写本の装飾と挿絵

アルフォンソ 10 世が関与したとされる写本は数多いが[15]，装飾・挿絵はすべてに施されているわけではない。本稿で紹介する二冊の他に美術史的観点から重要なのは，黄道十二宮や石の発見にまつわる挿絵が付された『宝石論』（*Lapidario*，エル・エスコリアル王立修道院図書館〈以下 EE〉，h.I.15，119 葉，402 × 291 mm）（Figs. 4–5）や，宮廷の王（1 葉裏[16]）のほか小型挿絵が 5 点残る『スペイン史』（EE，Y.I.2，196 葉，416 × 290 mm）などである。

アルフォンソ 10 世の写本工房についてはまだ不明な点が多い[17]。少なくともここで扱う二冊の場合，複数の職人が関与したことは様式的見地から間違いない。工房は王ならびに宮廷に伴

14） キリスト教徒に奪われたアラビア語写本の奪還は，ムスリム君主のイスラーム的正統性を証明する行為でもあった。O'Callaghan, J. F., *The Gibraltar Crusade: Castile and the Battle for the Strait*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 2011, pp. 92–96.

15） 近年の主要な展覧会カタログは次の通り。Izquierdo Benito, R. (comisario), *Alfonso X: el legado de un rey precursor*, Toledo, 2022; Rossell, A. (comisario), *Alfonso X y Galicia*, Lugo, 2021; Bango Torviso, I. G. (ed.), *Alfonso X el Sabio*, Murcia, 2009.

16） 以下，1 葉表 = fol. 1 recto，1 葉裏 = fol. 1 verso を意味する。

17） 王の写本工房とその仕事に関しては，Domínguez Rodríquez, Ana; Chico Picaza, María Victoria; Fernández Fernández, Laura に多くの論考がある。

Fig. 4 『宝石論』8 葉表
出典：*Lapidario de Alfonso X el Sabio*, Madrid, 1982.

Fig. 5 『宝石論』11 葉表，牡羊座
出典：*Lapidario de Alfonso X el Sabio*, Madrid, 1982.

い各地を移動したであろうし，人の出入りもあっただろう。王が可能な限りのモデル写本や人材を入手し（イスラーム美術からの影響については第 5 章を参照），それらを用いて，伝統的なキリスト教美術を学んだ画家が工房で主導的な役割を果たしたと推測される。画家がアルフォンソ 10 世の宮廷周辺の文化・習俗に通じていたことは明らかだが，スペイン中世美術史の流れのなかではその前後に類例が見出せない，特異な位置付けの作品群である。

4-1. 『聖母マリアの古謡集』

『古謡集』には四冊の写本が現存する。含まれる詩や挿絵数は，未完や重複の扱いにより数え方に多少幅がある。また写本相互の関係や制作順および制作年代については複雑な議論があるため，ここでは割愛する。

・To 写本（トレド大聖堂図書館旧蔵，現スペイン国立図書館 Ms.10069）。160 葉，320 × 220 mm，100 詩。挿絵なし。

・E 写本（EE, J.B.2）通称《音楽家写本 Códice de los Músicos》。361 葉，404 × 274 mm，417（ないし 427）詩。楽譜付き。十詩ごとに音楽家たちの挿絵が挿入される（Fig. 6）。

Fig. 6 『古謡集』音楽家写本 125 葉表
出典：Patrimonio Nacional. Real Biblioteca de Palacio.

Fig. 7 『古謡集』169 番, 226 葉裏, 4 コマ目
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 8 王国の紋章で彩られた長男フェルナンドの式服，アンダルスの工房作，1275 年以前，金糸・絹糸，ラス・ウエルガス修道院
出典：*Vestiduras ricas* (cat. exp.), Madrid, 2005, p. 161.

Fig. 9 『古謡集』25 番，38 葉裏，3 コマ目 キリスト教徒に金を貸すユダヤ人商人（赤い三角形の被り物の方がユダヤ人，異時同図法により同一コマの中に繰り返し描かれている）
出典：『古謡集』慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 10 『古謡集』165 番，222 葉表，3・5 コマ目
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

・T 写本（EE, T. I. 1）通称《豪華写本 Códice Rico》。256 葉，490 × 326 mm，193（194, 195 とも）詩。楽譜付き。210（212）枚，1257（1264, 1273）コマの挿絵。

・F 写本（フィレンツェ国立図書館 Ms. Banco Rari 20）。131 葉，450 × 314 mm，104 詩，540 コマの挿絵。

このうち T 写本と F 写本は，ひとつの詩につき一葉 6 コマ（長編は見開き二葉 12 コマ）で内容を図解する挿絵が施されている。慶應義塾図書館が所蔵するファクシミリ版は，もっとも挿絵数の多い T 写本のものである。

これらの挿絵は，当時のカスティーリャ社会の様子を如実に描き出したものとして紹介されることが多い。少なくとも服装に関してはそう言える。たとえば，獅子（レオンの紋章）と城（カスティーリャの紋章）に覆われた王の式服や被り物は（Figs. 1, 7），早世した嫡男フェルナンドの埋葬品に実例が見出せる（Fig. 8）。貴族や庶民という社会身分の違い，キリスト教軍，イスラーム軍の軍備，ムスリムやユダヤ人といった宗教的マイノリティ（および彼らのなかの身分差や職業）も描出されている。とはいえ，鷲鼻が強調される「ユダヤ人悪徳商人」（Fig. 9），豊かな髭にターバン姿の「ムスリム戦士」（Fig. 10）など画一的な人物像が使い回されている点にも注意すべきだろう。また中世絵画の常として，赤子や子どもは「小さな大人」として描かれ，現代の目からすると可愛らしさに欠ける。

Fig. 11　セゴビアの水道橋
出典：久米撮影（2004）

Fig. 12 『古謡集』107 番，154 葉表，2 コマ目
描かれたセゴビアの水道橋（中央の黄色い被り物の女性は本編主人公のユダヤ教徒女性）
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 13 『古謡集』2 番，7 葉表，3 コマ目　宗教行列を行う聖イルデフォンススと西ゴート王レケスウィント（7 世紀の実在の人物たちだが 13 世紀の服装で描かれる）
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 14 『古謡集』181 番，240 葉表　左側が攻撃を仕掛けるマリーン朝のイブン・ユースフ軍，右側がマラケシュを防衛するムワッヒド軍。後者は劣勢だったが聖母マリアの軍旗を掲げたおかげで大勝したという奇蹟譚
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

詩の中で実在する土地名が言及されることは多いが，挿絵が現実を反映しているとは限らない。たとえば現存するセゴビアの水道橋は半円アーチが積み重ねられた古代ローマ建築だが，同地が舞台となる詩の挿絵ではイスラーム風の馬蹄形アーチが連なる形であり（Figs. 11–12），画家が伝聞による知識に基づいて描いたことがわかる。さらに興味深いのが，本挿絵における時代感覚の欠如である。古代や初期中世の場面や人物は，13 世紀とまったく同様に描かれている（Fig. 13）。

一方で，画家たちは，ときに現代の漫画につながるような表現上の工夫を施している。マラケシュの戦闘エピソード（Fig. 14）では，中央に並ぶ第 3・4 コマで相対するイスラーム両軍

Fig. 15 『古謡集』52 番，77 葉表，5・6 コマ目　モンセラット山の野生の山羊の親子が修道院の扉口に並んで搾乳される奇蹟場面。背景に内容とは無関係の黒ウサギたちが見える
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

が対立構図で示され，最下段の第 5・6 コマでは左から右という視線の流れを分断するぶち抜き構図が採用されて，右側の軍勢の圧勝が明示される。さりげなく挿絵に散りばめられた，テキストで言及されない要素を発見するのも，画家の遊び心を垣間見るようで楽しい（Fig. 15）。

それにしても数百に及ぶ詩を新たに視覚化する試みは，画期的であった。中には構図が単調すぎるものや絵だけでは話の流れが追えないものもあり，挿絵化がすべて成功しているとは言い難い。それでも，既存のモデルを写すことが作品制作の基礎であった中世の画家たちにこれだけの新たな仕事をさせたこと自体が，視覚表現に対する王の強いこだわりを物語っている。いや，楽譜が付されている点を考慮に入れれば，これらは語られ，歌われ，弾かれ，見られた，すなわち耳と目の両方で味わう総合芸術であった。もとよりこの写本の小さなサイズは大人数での鑑賞に向くものではない。王と，王が許したごくわずかな数の人物だけが楽しむために膨大な労力と時間をかけて制作された究極の贅沢品だったといえるだろう。

4-2. 『チェス，さいころ，盤上ゲームの書』

本書（EE，T.I.6，97 葉，400 × 280 mm）は，イスラーム世界を通して伝わった各種ゲームの，西欧最古の説明書と問題集である。チェスに加えて，バックギャモンやアルケルケ，さいころ遊び，さらにチェスにさいころを組み合わせたゲームや四人チェスなどの遊び方について，アラビア語文献からの翻訳を中心に中世カスティーリャ語でまとめられている。

150 点を数える挿絵では，コマの配置が詰将棋のように図示化され，また，盤を挟んでゲームに興じる多様な人々の姿が描かれる。高尚なゲームであるチェスでは，王族や聖職者，貴族が使用人に飲物や音楽を奉仕させながらゲームを楽しむのに対し，賭博が横行したさいころ遊びでは庶民が身ぐるみ剝がされ，殴り合い，嘔吐する乱痴気騒ぎが繰り広げられ（Figs. 16–17），当時の各種ゲームに対するイメージがよくわかる。

本写本には『古謡集』豪華写本の繊細なタッチとは異なる線描と着彩がみられる。ゲームに

Fig. 16 『ゲームの書』67 葉表
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 17 『古謡集』76 番，113 葉表，1 コマ目
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 18 『ゲームの書』17 葉裏（部分）
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 19 『ゲームの書』20 葉裏
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 20 『ゲームの書』22 葉表
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 21 『ゲームの書』38 葉表
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

興じる人々には本文中では触れられておらず，挿絵に銘文もないことから，人物の同定は容易ではない。しかし『古謡集』以上に，人々の宗教・民族・性別・年齢・社会身分の多様性が顔貌表現ならびに衣装・装飾品に見出せるほか（Figs. 16, 18–27），背景の建築モティーフもゴシック風建築，多弁形アーチなどイスラーム建築を想起させるもの，軍事用テントなどバラエテ

Fig. 22 『ゲームの書』40 葉裏
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 23 『ゲームの書』41 葉裏
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 24 『ゲームの書』64 葉表
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 25 『ゲームの書』72 葉表
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 26 『ゲームの書』48 葉表
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 27 『ゲームの書』47 葉裏
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 28 『ゲームの書』96 葉裏，宇宙チェス
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 29 『ゲームの書』97 葉裏，宇宙バックギャモン
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

ィに富んでいる（Figs. 21–27）。

解釈に惑う例として，48 葉表の挿絵を挙げてみよう（Fig. 26）。紋章から王族と分かる左側の男性は，自分に近い方の女性の胸を触っているか，盤を指さしているか，どちらであろうか。湯上りであるかのように薄衣でくつろいでチェスで遊ぶ人々自体は類例があり（Fig. 22），王の宮廷で入浴文化がなお根付いていたことを窺わせる。しかし―中世写本では往々にして見られる現象だが―女性たちの顔だけが故意に消されているところからすると，彼女たちは悪や悪徳に関する表象，すなわち娼婦か愛人と考えられたのだろう。そうであれば，この王族男性をアルフォンソ 10 世と同定することは難しい。見開き左側の 47 葉裏とセットにして（Fig. 27），着衣の貴婦人とチェスを楽しむ左側の王を「正しき王」，右側の悪徳に耽る王を「悪しき王」として対照的に表したとみるのが適当かもしれない。左を早世した王太子フェルナンド，右を反乱した王子サンチョの二人の息子たちとする説もあるが，それを補強する材料はない。

最後に，王の思想に関わる挿絵として，本写本最後の「宇宙チェス」（Fig. 28）と「宇宙バックギャモン」（Fig. 29）に言及しておきたい。最上部でクッションに座る王自身を含めた七名は，本文によれば，太陽，土星，木星，火星，金星，水星，月を表す。ここに，『宝石論』など科学写本にも通じる，宇宙の天体や鉱物といった自然が人間に及ぼす影響への王の深い関心が読み取れる。換言すれば，人間の運命は変えられるのか，偶然に支配されるのかという問である。本書が，戦略と戦術で勝敗が決まるチェスのみならず，運次第のさいころ遊びをも含んでいるのは示唆的である。長年の政治的野望が潰えた挙句，セビーリャの町に事実上の幽閉を強いられた晩年の王の心境が，歴史上ほぼ先例のないこうした斬新な挿絵に反映されていると見ることは，それほど不自然ではないように思われる。

5.『チェス，さいころ，盤上ゲームの書』と『聖母マリアの古謡集』にみられるイスラームの要素

イベリア半島の一部は約800年にわたり，イスラームの支配下にあった。711年には，アラブ軍によりイベリア半島のほとんどが征服された。756年，シリアから逃げてきたアブド・アッラフマーンが後ウマイヤ朝を開き，そのもとで，イスラームの技術を集めた建築物や，贅をつくした美術工芸品が作られた。しかし，「レコンキスタ」の進展により，イスラームの領土は縮小していく。有名なアルハンブラ宮殿は，イベリア半島最後のイスラーム王朝となったナスル朝の城塞である。

本章では，イスラーム美術の特徴と，イベリア半島のイスラーム美術について紹介したうえで，『ゲームの書』と『古謡集』にみられるイスラームの要素について述べる。

5-1. イスラーム美術の特徴

イスラーム美術は，①イスラーム圏で発展した美術，②ムスリムによって生み出された美術，③ムスリムのために生み出された美術のすべてを指す。すなわち，ムスリムがキリスト教徒のパトロンのために制作したものも，イスラーム美術として研究されてきた。

7世紀初めにムハンマドがアラビア半島でイスラーム教を創始してから，驚くべき速さでイスラームは東西へと広まった。イスラーム圏となった地域は，もともと東ローマ帝国とサーサーン朝ペルシアの領土であったので，イスラームは，ビザンティン文化と古代ペルシア文化を継承した。最初のイスラーム王朝であるシリアのウマイヤ朝の建築・美術には，ギリシア・ローマの要素がつよい。次のアッバース朝時代には，ギリシア，ペルシア，インドの科学がアラビア語に翻訳され，新たな知見が加えられて，イスラーム科学が発展し，それはイスラームの建築や美術・工芸の発展にも寄与した。そして，アッバース朝時代のイラクで成立した抽象的な文様や独自の様式が，イスラーム帝国各地に伝播すると，地元の美術伝統と融合し，特色のある美術様式が各地に生まれた[18]。

イスラーム教は偶像崇拝を禁じているため，神の似姿を表すことはなく，モスクやクルアーン写本，クルアーン台など宗教にかかわるところでは，生き物の具象的な表現は一切見られない。他方，宗教とは関係のない世俗的な建築物や物語写本，美術工芸品においては，生き物の具象的な表現が数多く見られる。

18） イスラーム美術については，J.ブルーム，S.ブレア著，桝屋友子訳『イスラーム美術』岩波書店，2002；T.スタンリー『宮殿とモスクの至宝』V&Aパブリケーションズ，2005；桝屋友子『イスラームの美術』東京美術，2009など。

Fig. 30　象牙の小箱，スペイン（おそらくコルドバ），962 年ごろ，ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館 V&A　301-1866
出典：© Victoria and Albert Museum, London

Fig. 31　象牙の小箱，スペイン，11 世紀前半，ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館　V&A　10-1866
出典：© Victoria and Albert Museum, London

5-2.　イベリア半島のイスラーム美術

イベリア半島の場合は，後ウマイヤを開いたアブド・アッラフマーンが，アッバース朝によって滅ぼされたウマイヤ朝の生き残りであったことから，その建築にはウマイヤ朝の要素がつよい。そのため，コルドバの大モスクのミフラーブ（メッカの方向をしめす壁龕）は，ダマスカスの大モスクや岩のドームなどのウマイヤ朝の建築物と同様，ビザンティン美術に由来するガラス・モザイクで装飾されている。そこには，後ウマイヤ朝が，ウマイヤ朝の後継であることを内外に示す意図が反映されている。その一方で，コルドバの大モスクに用いられている柱や馬蹄形アーチは，地元イベリア半島の西ゴートの建築に由来するものである。

後ウマイヤ朝のもとでは，象牙に彫刻を施した小箱が制作され，王族たちに使用された（Fig. 30）。こうした贅沢な美術工芸品は，ヨーロッパの人々にとっても憧れであったため，象牙の小箱のなかには，のちにキリスト教徒が入手し，スペインの教会で聖遺物箱として使用されたものもある（Fig. 31）。

「レコンキスタ」が進展し，イスラームの領土は縮小の一途をたどったが，イベリア半島におけるキリスト教徒とムスリムの接触は，敵対的なものばかりではない。14 世紀のトレド製と考えらえるアストロラーベ（Fig. 32）には，アラビア文字，ラテン文字，ヘブライ文字が刻まれており，ムスリムとキリスト教徒とユダヤ教徒が協力して科学を探求していた様子がうかがわれる。そのほか，14 世紀にナスル朝で織られたアラビア語銘文入りの布が，司祭の儀式用マント（Fig. 33）に仕立てられるなど，高度な技法による優れたイスラーム染織品は，キリスト教教会で使用された。

イスラーム美術・工芸に用いられる高度な技術は，イベリア半島からヨーロッパに伝わった。二度の焼成により金属的な輝きを得るラスター彩陶器の技法は，そのひとつで，14 世紀後半にバレンシアで作られたラスター彩のアルバレロ（薬壺，Fig. 34）が現存する。この技法はイタリアに伝わり，16 世紀にマヨリカ陶器が生まれた。ムスリムが居住していたイベリア半島と，

Fig. 32　アストロラーベ，スペイン（おそらくトレド），14 世紀，アガ・ハーン美術館　AKM　611
出典：© The Aga Khan Museum

Fig. 33　14 世紀後半，ナスル朝製の布で仕立てた儀式用マント，ブルゴス大聖堂博物館蔵
出典：Dodds, J. *Al-Andalus*, 1992, p. 336.

Fig. 34　アルバレロ（薬壺），14 世紀後半, バレンシア（マニセス），ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館　V&A　C. 123-1931
出典：© Victoria and Albert Museum, London

トルコやエジプトと貿易を行っていたイタリアは，イスラーム世界に開かれた窓であり，ここからイスラームの科学や技術，美術・工芸がヨーロッパにもたらされたのである[19]。

5-3.　両写本にみられるイスラームの要素

まず，『ゲームの書』を見ると，64 葉表では，ムスリムとキリスト教徒がチェスに興じている（Fig. 24）。二人のいるテントに書かれたアラビア文字に似せた字の書体は，ウマイヤ朝の象牙の小箱（Fig. 30）によく用いられるものであり，ヨーロッパ人の画家は，そうした小箱を参照していたのかもしれない。17 葉裏の椅子に座る人物の腕の部分には，ティラーズと呼ばれる，ムスリムの君主が臣下に与える，銘文入りの布地が描かれており（Fig. 18），この写本の画家が，ムスリムの風習について知識を有していることがわかる。

20 葉裏に描かれているのは，モンゴル系の人々だろうか（Fig. 19）。22 葉表では黒人男性が，アラビア文字のついたクッションにもたれてチェスをしている（Fig. 20）。このようにさまざまな人種を描くことで，アルフォンソ 10 世の宮廷の国際性を誇示しているのかもしれない。

38 葉表には，イスラーム圏でクルアーン台として用いられる形態の書見台が描かれている（Fig. 21）。40 葉裏には，典型的なスペインのイスラーム建築が描かれている（Fig. 22）。41 葉

19）　スペインのイスラーム美術についてはDodds, J. *Al-Andalus: The Art of Islamic Spain*, New York, 1992; Rosser-Owen, M., *Islamic Arts from Spain*, London, 2010; Ecker, H. *Caliphs and Kings*, Washington, D.C., 2004 など。イタリアとイスラーム美術については鎌田由美子「14 世紀から 16 世紀におけるイタリアとイスラーム美術」『イスラーム地域研究ジャーナル』5（2013），pp. 51-64.

Fig. 35 『古謡集』21 番，33 葉裏，1 コマ目
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 36 『古謡集』56 番，83 葉表，3 コマ目
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

Fig. 37 『古謡集』108 番，155 葉裏，2 コマ目
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

裏の右手の人物が持つ本には，アラビア文字に似せた文字が書かれているが，アラビア語のチェスの指南書を描いているのだろうか（Fig. 23）。72 葉表には，キリスト教徒らしき人物に命じられて，アラビア文字に似せた文字で何かを書きとっている人物が描かれている。しかし，彼が手にしているのは，イスラーム圏で用いられる葦ペンではなく，ヨーロッパで使われる羽ペンである（Fig. 25）。おそらく画家は，ムスリムが葦ペンを使うことを知らないのだろう。

次に，『古謡集』を見ると，33 葉裏をはじめ頻繁に描かれる吊下げランプは，モスクランプに典型的な形態である（Fig. 35）。83 葉表に描かれた聖母子像の台座には，幾何学的な模様の布が掛けられ，そこにはアラビア文字を模した文字が見られる（Fig. 36）。こうしたデザインの布は，高価なイスラーム圏の布や絨毯を示しているのかもしれない。155 葉裏には，薬屋に並ぶアルバレロ（薬壺）が描かれている（Fig. 37）。この細長い筒状の陶器の入れ物は，元来イスラーム圏で広く使用された，輸送や貯蔵に用いられる壺であったが，ヨーロッパにもたらされると，美しい色合いや柄ゆえに尊重され，聖遺物入れとして用いられることもあった。この形状の陶器は，のちにヨーロッパでは薬壺として定着した（Fig. 34）。222 葉表には，イスラーム圏でよく使われるテントのなかに座すムスリムらしき人物や，騎馬軍が描かれている（Fig. 10）。この騎馬軍の描き方は，アッバース朝の『マカーマート』写本の挿絵（Fig. 38）を彷彿とさせる。226 葉裏には，ムスリムたちが跪き，キリスト教徒と対話する様子が描かれている（Fig. 7）。240 葉表の右上には，座したムスリムが描かれているが，その両腕の部分には，ティラーズが描かれている（Fig. 39）。

5-4. おわりに

両写本の挿絵からは，当時のムスリムとキリスト教徒との友好的な関係が具体的に浮かび上がってくる。キリスト教徒であるこの写本の制作者は，モスクランプや，クルアーン台，ティ

Fig. 38 『マカーマート』写本の挿絵，バグダード，1237 年，パリ国立図書館（BNF arabe 5847）
出典：Ettinghausen, R. *Arab Painting*, Geneva, 1962, p. 118.

Fig. 39 『古謡集』181 番，240 葉表，2 コマ目
出典：慶應義塾図書館所蔵ファクシミリ版

ラーズなどを知っているが，ムスリムの写字者が葦ペンを使うことは知らず，その知識は限定的なようである。

「レコンキスタ」が進展しても，イベリア半島に 8 世紀初め以来根付いたイスラームの科学や技術，美術，建築の痕跡は，簡単にはなくならなかった。その一部は，イベリア半島のキリスト教徒の生活や美術様式に取り込まれ，内在化したと考えられる。十字軍や「レコンキスタ」などから，ムスリムとキリスト教徒は常に敵対していたような印象を持つ人も多いかもしれない。しかし，両者の関係には，友好的・協力的なものから好戦的なものまでバリエーションがあった。そのことを実感させてくれる点においても，両写本は貴重な存在であると言えるだろう。